



たき やま まもる
滝 山 養 氏

昭和7年東京大学工学部卒業後鉄道省に入り、国鉄鳥栖管理部長、本省施設局計画・設備課長を歴任し、昭和26年貨物、停車場・操車場視察のためアメリカへ出張、帰国後調査役、広島鉄道管理局長、審議室長を経て、昭和35年常務理事・昭和38年国鉄を退職して鹿島建設入社、現在に至る。

土木屋でありながら土木本来の仕事から永らく離れていたため、今回のような論文が学会賞の対象になろうとは思ってもありませんでした。淡々と語る滝山さんは、31年間にわたる鉄道生活を昨年退き、鹿島建設の土木企画担当常務として民間入りされた。建設会社の参謀長的な仕事で、市場調査、受注対策、経費分析から要員計画に至る広汎な運営計画を処理しておられる。この人の過去の経験を考えるときわめて適格なポストといえよう。

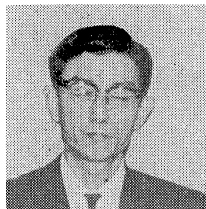
35年から38年にかけて施設、建設および長期計画担当の常務理事として国鉄経営の中枢に加わった滝山さんは、審議室長時代から引き続き日本経済の成長に見合う輸送力増強問題を国鉄の経営を建直すこととあわせて取り組まねばならなかった。世論の突き上げを受けとめつつ、黙々と研究にはげんでいる滝山さんを始め、担当者の苦悩が目に見えようである。

この中であって受賞論文のテーマが、輸送力増強の中心である線路施設を、いかなる方法によれば増強の効果

をあげ、しかも国鉄の収支を改善できるかという緊要な課題として解決をせまられたのである。現状の分析に始まり独創的な方法論を展開し電子計算機を自由に駆使して巨費を要する幹線輸送力増強設備の投資方式を解明してゆくこの研究は、この人のシャープな頭脳、優れた分析力と指導力、交通工学全般にわたる深い造詣なくして達成できるものではない。31年間にわたる豊富な経験のエピローグとなった堂々たる労作である。

物事を突き詰めてゆくには幅もまた必要だが息切れしない長さも必要という滝山さんは、学生時代から山が大好きで、自然に接する機会も多いと考えて土木を選んだ由である。今でも閑をみては野山を歩き廻って頭の転換と健康上の実益をかねているという。20万の地図を眺め頭の中にかけての足跡をプロットしたり、テレビなどで山の風景を見ると限りない憧憬をおぼえるという滝山さん、50代とは見えぬ若々しさの秘密はどうやらこの辺にあるらしい。

土木事業というものは社会への強い影響をもっているのだから、広い視野と長期的な見通しとを総合的に把握することが必要でしょう、これが若い技術者にこの人が贈る言葉である。このほど東大から学位を授与された由、受賞とともに二重の喜びであろう。幅広いご活躍を心から念じている。



み か さ ま さ ん ど
三 笠 正 人 氏

昭和23年九州大学工学部を卒業し昭和25年大学院特別研究生第一期終了後九州大学へ助手として勤務・昭和27年大阪市立大学理工学部講師・昭和38年同校助教となり現在に至る・工博

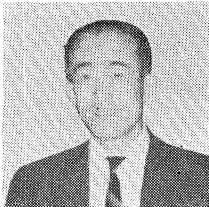
38年の3月から11月にかけて三笠さんの圧密とせん断に関する5編の研究論文が続ぎまに発表された。内容には自信があったが、オーソドックスな学問体系への反撥という意味のものでもあっただけに土木学会賞の対象としては正直なところ自信がなかったそうである。一時は三笠教の教祖などと呼ばれ、期成のものへの反骨精神きわめて旺盛だったと聞くこの人にとっては、学会も随分この方面で包容力をみせてきた、と感じたらしい。しかしこの受賞を機会に自分の進んできた道に明るい未来を見出してホッとしていると率直に語る三笠さんなのである。

飛行機が好きで航空を勉強し、終戦で土木へ移ってからは本論にコンクリートを選び、大学院時代は担当教授の指導で耐震構造を研究し、最後には土質力学へ着落していたという三笠さんの研究道程は、その内容においても決して平坦なものではなかったらしい。

有明海の人工島の沈下問題を機会に本格的な土質の勉強を始めた25年頃は、まだ文献も少なく、ひとつひとつ

つ自分で考えながら進まざるを得なかった、このことが結果的には研究達成の最短コースになったという。27年に九大から大阪市大へ移ってからの5、6年間は、時おり学会で講演する以外は、まとまった論文を書かず、もっぱら思索し、現場から持込まれてくる問題を検討し、実験データの処理のあけくれで、ようやく4年ほど前から自分の考えを整理して発表し出したそうである。こり性で理屈屋で通っている反面宮沢賢治のメルヘンや、空想科学小説が大好きだという三笠さんは、あてどもない空想にふけることが非常に楽しみらしい。学問上の貴重なアイデアもそこから生み出されるのであろう。ときには好きなピアノをひきながら空想の世界に遊ぶという三笠さんの生活が厳しい面ばかりでないことを喜びたい。論文づくりにはあまり能率的とはいえませんが、と前置きして、いわゆる基礎的研究も大切だが、私の経験からして若い研究者には現場で困っている問題に真剣にとりくむことをおすすめしたい、それが結局本当の生きた学門を生むのではないかと熱っぽく主張するこの人の言には耳を傾けさせられた。

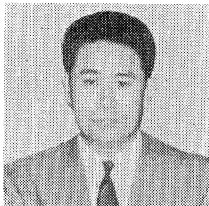
学問の世界は本来もっとも自由であるべきで、固定観念にのみとらわれていると間違いを見逃すことになる。自分で試みて矛盾を発見したらあくまでも解決する勇気をもたなくてはならない、この辺が三笠さんの研究信条のように見られる。今後は日本のみならず世界の学界に三笠正人ありの気概を示して頂きたいものである。



ひぐち よしろう
樋口 芳朗 氏

昭和19年東京大学工学部卒業・昭和21年東京大学大学院卒業後国鉄鉄道技術研究所に入所現在に至る。この間昭和28年にアメリカへ、昭和37年フランスへ留学。工博

戦後の混乱時代21年に大学院を出て国鉄へ入り、20年近くを研究所でコンクリート関係の研究に打ち込み、アメリカとフランスに一回ずつ留学、優れた語学力は昭和33年から35年にかけての文献調査委員長時代に遺憾なく発揮された。学会ではコンクリート常置委員会の有力メンバーとして標準示方書、PC指針の改訂に果された努力は大きい。各方面にわたる該博な知識と親しみやすい性格から、専門外の各種委員会へ引張りだされ卓抜したアイデアをもって常に議題の中心となる。今年度の役割りは会誌編集副委員長。土木関係の研究は一人ずもうでは駄目で、周囲の協力と指導者層の理解が研究上どんなにプラスになるか判らないと語る樋口さん、いかに環境に恵まれていたとはいえ、とかくカンに頼りがちだったセメント注入工法を、複雑きわまる空げきを分類体系化することから始め、グラウトの適用限界と拡張範囲の手法についてユニークな理論を展開し、実験のくり返して確かめながらセメント・薬液同時注入工法を見出して



いわま しげる
岩間 滋 氏

昭和28年東京大学工学部卒業・昭和30年東京大学大学院修士課程終了後建設省土木研究所勤務・昭和36年8月日本道路公団へ転職し現在に至る。昭和31年3月より1カ年ドイツ政府招致技術留学生として西ドイツ留学。

大学院時代マスコンクリートの強度についての研究を進めた岩間さんは終了と同時に土研へ入所、今回の受賞論文のテーマに正面から取組むことになる。31年から1年間、非常な難関だったドイツ政府招致技術留学生をパスして西ドイツへ。この人のドイツ語と道路に対する見識は後に名神高速道路のコンサルタントとして始めて来日したドルシェ氏をして「公団は早く土研に交渉して彼を移籍させるべきだ」と勧告せしめたほど本格的なものであったと聞く。語学全般にわたり昔から強い方であるらしい。帰国して1年後、33年から土研千葉支所の建設工事が開始されるや、道路の大型実験所の設計・施工を指導しつつ精力的な実験にとりかかることになる。屋外実験が主となるので日中は温度が上って目的の実験データが得られず、もっぱら泊り込みが続く。日曜日でも惜しんで研究所へ出かけたため岩間天皇？の異名をたてまつられたのもこの頃のことである。

がむしゃらに実験するしか方法がなかったので……と

いった地道な努力は、広く化学の領域におよび研究者層の比較的うすかった時代に手をつけただけに大変なものだったと思う。今日の輝かしい研究成果はその課程においてプレパックドコンクリート工法のわが国における育成、PCグラウトの改良、簡易なPCグラウト試験器具の考案などの幾多の業績を生み各方面で広く応用されつつある。学会誌6月号の「話のひろば」欄に「技術の生れ育つ風土」なる一文がある。持論である国産技術の育成と開発に寄せるこの人の並々ならぬ熱情が全編にみなぎり、息子を土木技術者にしようと思ふ心から思える「乳と蜜の流れる里」を夢みてと結んでいる。外国技術一辺倒をやめて小さな考案、小さな工夫の芽を枯れさせることなく、土木技術者全体の力で国産技術を育て上げる土壤を作ろうという提案は国際競争のど真中に放り出されたわが国技術界の今後の大きな課題として真剣に考えねばなるまい。

考えることが何より好きだというこの人は、ナナ・ダイスというものを市販したことがある。夫人は土木賞受賞者の滝山 養氏の実妹、父上も土木関係だったとのこと、一男二女の幸福なご家庭である。昭和28年度に工学材料の模型解析で学会奨励賞をうけて10年、今回の吉田賞受賞を機として健康に留意され学会賞の獲得を始め、科学技術全般にわたる幅広い活躍を望む。

頭をかく岩間さんは、いじめ抜かれたという若い人に非常に人気があった。ケンカ早いところもあるが面倒もよく見たし、人柄が純粋だからだろう。

技術者はよく政治力に弱いといわれるが、それは技術者が数字を大切に政治家に理解させようとする努力が不足しているからだ……とキッパリ言い切るあたり、この人の技術に対する強い自信がよく出ていると思う。

岩間さんの趣味はきわめて広い。スケートは満州育ちで今でもアイスホッケーのレフリーをやる由、車の運転、テニス、バドミントンなどのスポーツから絵ハガキの収集、カメラ、旅行、音楽、囲碁 etc、とくに旅行には目がないらしく、いま4つになるお嬢さんが生まれてから連れ出した旅行の数は19回におよぶとのこと、安く上げるコツもよく知っておられる。

ご家族は4人、奥さん、お嬢さんに1才の坊やを加えた一家の団らんは暖かい。

岩間さんの今の仕事は東名高速の計画面担当とのこと、本格的なハイウェイ時代に入った今日、この人を通して解決すべき多くの問題は多いことだろう。

やがては海外へ出て仕事をしてみたいと抱負を語る岩間さんの未来は輝かしいものがある。ご自重を祈る。



はやし まき お
林 正 夫 氏

昭和 28 年京都大学工学部卒業後電力中央研究所に入所現在に至る・この間昭和 34 年 10 月～35 年 8 月日伊文化協定による政府留学生としてイタリアへ留学・フランスのマルパッセダム決壊現場を視察。

まだ開設当初の京大防災研にはただ草だらけの敷地があるだけ、そこで本論に水理実験をやったが「どうも草刈りの方が多かったので私は 防災研の 草分けなんですよ」と、ユーモアを混えて語る林さんは、今回の受賞の弁を「岩盤力学も私はほんの前座を務めているだけで、真打ちの研究者は今から続々と現われますよ…」とけんそんする。

林さんは四高を経て、28 年に京大土木(旧制)を卒業ただちに電研に入り、アーチ ダムの構造研究に若い情熱を傾けてきた。各電力会社のアーチ ダム建設の研究面での一翼に参加すると共に、基礎変形とアーチ ダムの応力の関係、周期的温度応力、数理論の適用、構造模型の破壊実験などのテーマに取り組んでいった。

「当時、バリメーター ジョイント、サドル、ドーム型ダム…と、けんらんと開花したイタリアのダム設計の威力に魅せられて」昭和 34 年に、日伊文化協定による政府留学生として調査研究に渡伊。たまたまフランス・

マルパッセ ダムの決壊で、急きょ視察の機会を得「南仏の平和なフレデュスの街が、一夜にして広ばくとした死の砂漠と化し、夕やみのなかで家族のなきがらを探す人達を見て、この時ほど、土木技術者の責務の重大さを体験したことはなかった」という。

この強烈な印象は帰国後の林さんをさらに駆りたてて今回の受賞論文の素地を形づくって行ったのであろう。林さんの今回の研究は、岩盤に特有な節理、われめなどの不連続な弱面が巨視的な強度評価や、応力の伝わり方にどのように影響するかを考える一つの手法について、独創的な着想とユニークな理論を提案したものであり、今後の岩盤力学の進めかたに新しい一つの方向を指し示していて貴重なものである。

ご家庭では一男一女の父「日曜日には奥さんと子供さん達と電研のテニスコートによく見かける」との噂、「電研サッカー部の第二軍、出つ張ったお腹を凹ましに美容体操のつもりで球を蹴らせてもらっています」との本人の弁など……メンタルな労働の花と、フィジカルなトレーニングの汗を愛する人柄がうかがわれる。

今後はサッカーのチーム ワークも参考に、グループ研究の指導性も身につけて、さらに発展を期待したい人である。35才。



だいちょう あき お
大 長 昭 雄 氏

昭和 25 年大阪市立都島工業専門学校土木科卒業後日本発送電入社・昭和 26 年関西電力に移り現在に至る・この間 25～27 年新庄水力発電所建設所・30～32 年殿山水力発電所建設所・32～38 年黒部第四発電所建設所を経て 39 年 4 月より本社建設部水力計画課勤務

黒四関係では昨年度の学会賞に高野 稔氏が選ばれており、大長さんで連続 2 年受賞ということになる。昭和 25 年、旧日本発送電へ入社、26 年に関西電力へ移って以来、ダム一筋に生き抜いてきた現場技術者で、新庄、殿山、黒四と着々と研究の地歩を築きつつ現在に至った。現場で鍛えた逞ましい身体と、真実の追究のために徹底的にやり抜くというねばり強い性格が研究の力強いバックボーンとなっている。

協力して頂いたすべての方々に心から感謝していますという大長さんは、新庄、殿山の現場をへて 32 年から 6 年間、黒四ダムにおいて種々の実験を重ねながらアーチ ダムの基盤内の浸透流に関する研究に本腰を入れてとりかかった訳である。閑をみてはダムサイトにもぐり込み、岩盤の割れ目から湧出する浸透水の流出状態を幾度となく観察、全体の工期を頭に入れながら時間の制約に追われつつ一筋に研究をすすめていった大長さんは、

体力、精神力をとまなう仕事だけに非常に健康管理に気を使ったそうである。実験設備を外注すると時間がかかるので戦時中の学徒動員時代のウデ、つまりゼロ戦の機関砲づくりの経験を生かして設備の一部を研究グループで作り上げたこともあるという。器用なタチといってしまえばそれまでだが、大変な実行力である。研究を始めたころダムの模型材料に適するジュリー強度をもつ「寒天」を求めて雪の舞う諏訪湖畔の寒天工場や研究所を片っぱしから探し廻ったこともあるという。雪をいただいた立山連峯を真近くに仰ぎ、崇巖なペールに包まれた黒四のダムサイト、地下にもぐり水の流れに目を光らせ、世紀の大工事を支える貴重な一連の研究に自分を忘れながら必死になって勉強を続けてきたこの人には山の男の匂いが何時までも消えない。今後も許されるならば自分の性質に見合った勉強をコツコツ続けてゆきたいと語る大長さんの趣味は釣り、それも好みの味覚にふれられる鮎釣りだとのこと、6 月 1 日の解禁がさぞかし待たれたに違いない。黒部名物の岩魚釣りはどうですというと、あまりうまい魚とは思えないのでと笑う。一本気な人なのであろう。ご家族の円満さは定評のあるところ、職場においても自重して大成してほしい。黒四で働らいたという自負をどうか一生持ちつづけられたい。



ふか さわ やす はる
深 沢 泰 晴 氏

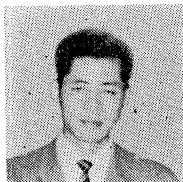
昭和 35 年山梨大学工学部卒業・昭和 37 年東京大学大学院修士課程終了し博士課程に進学し現在に至る。

昭和 24 年に制度化した土木学会奨励賞は、今年で 31 名の受賞者を生み出している。26 才が最年少で 3 人、28 才の深沢さんは 9 人目の輝ける 20 代のホープといえよう。35 年に山梨大学を経て、東京大学大学院に進む。目下博士コースの最終年を迎えて、研究の総まとめにきわめて忙しい。この受賞で「学会に何か大きな借りをつくってしまったような気持です。これからがんばって少しずつでもお返ししていきたい」と謙虚に語る深沢さんである。山梨大学に在学中から曲線橋の研究に手をつけ、これまでに連名を含む 13 編の関連論文を発表している。意志強く、一貫した研究に青春を傾けてきた。修士号授与式の総長訓辞で茅さんから「余り頭が切れすぎ向うが見えすぎても、じっくりした研究はできないものだ。テーマを決めたら関係文献に振りまわされることなく、腰をおとし自己のペースでオリジナリティを生かしていくのがよいようだ」ときとされた由、この言葉を実感としてそのまま、これから研究分野に携わろうとする若い後

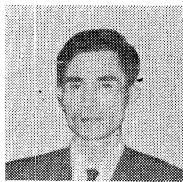
輩に送りたいという。よきリーダーと恵まれた環境におかれた幸運の人ともいえそうである。深沢さんは現在、学会の文献調査委員会の一員として構造関係の部門を担当されている。毎月送られてくるぼう大な外国文献の検討整理、抄録作成にあたっており、また委員会では活発なディスカッションを投げかける。構造分野全般にわたる発言には、つねに学問、研究に対するきびしい態度がうかがわれる。長大アーチ橋の合理的な設計法の解明に有力な手がかりを与えたという受賞論文は、修士論文として書かれたものの一部で、勉強に集中すると眠れない夜が多いという努力型のこの人らしいしっかりした研究である。日本の構造関係の研究は、今や試練の壁に直面しているのではないだろうかと語る。その壁は、現在の研究が一段落したら後は塑性域における構造物の振動問題にじっくり取り組みたいという深沢さん自身のりこえなければならぬ険しい壁でもあるようだ。将棋はアマチュア二段格、碁の方は攻撃は最善の防ぎよなりという猪突猛攻型だそう。学位論文をまとめることと、碁の初段をとることが今年の課題だという。野球は好きだがライトを守らされることが多い方、B.B. (ブリジット・バルドー) が彼の好きなアクトレスの一人とは陰の声……。理想のパートナーを得られ、次代をにう研究者としてよく学びよく遊べと申し上げたい。“フカサワ・ガンバレ” 文献調査委員会一同の声でもある。

注：受賞者の横顔の文責はすべて編集部にあります。

吉 田 研 究 奨 励 金 受 賞 者 一 覧



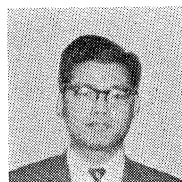
赤 塚 雄 三 氏
運輸省港湾技術研究所



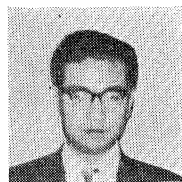
渡 辺 明 氏
九州大学工学部



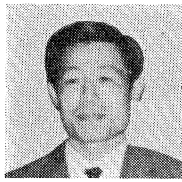
森 田 司 郎 氏
京都大学工学部



藤 井 学 氏
神戸大学工学部



青 柳 征 夫 氏
東京大学工学部



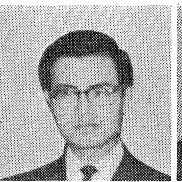
町 田 富 士 夫 氏
国鉄東京工事局



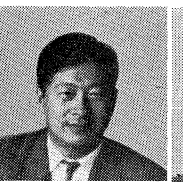
宮 坂 慶 男 氏
国鉄東京工事局



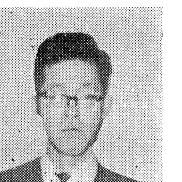
石 川 元 衛 氏
国鉄東京工事局



北 井 良 吉 氏
国鉄東京工事局



小 寺 重 郎 氏
八千代エンジニアリングKK



岩 城 良 氏
鹿島建設KK技術研究所

奨 励 金 受 賞 者